ジェイムズ・シャーリーの『姉妹たち』と劇場閉鎖

James Shirley's *The Sisters* and the Closure of the Theatres

石原　万里*
福島工業高等専門学校一般教科
Mari Ishihara
Fukushima National College of Technology, Department of General Education

(2010年9月17日受理)

The Sisters were presented in 1642, shortly before the theatres in London were closed due to the Puritan Revolution. The Prologue of the play delivers "London goes to York," which depicted the fact that Charles I went to York to gather the support of the Royalists. The last play in Caroline Drama is strongly influenced by the changing period, in which the King's authority was questioned. Professionally controlling audience's sympathy, antipathy and laughter, Shirley made up a more attractive fake Duke than the real one in *The Sisters*, which consequently shows the author's view on the period.

Key words: James Shirley, Caroline Drama, *The Sisters*,

1. はじめに

ジェイムズ・シャーリー (James Shirley, 1596-1666)は、1640年から1642年までの2年間、国王一座(King's Men)の座付き作家となった劇作家である。シャーリーの出生作が『お世辞学校(またの名、恋のたくらみ)』(*The School of Compliment (Love Trick)*, 1625)であり、劇場閉鎖の1642年まで劇団のために戯曲を書き続けていたことを考えると、1625年に戴冠し、清教徒革命により、1649年に処刑されるチャールズ一世の時代に重なる。[1] だが、国王一座の座付き作家でありながら、後世でのシャーリーの評価はそれほど高くはない。それは、印象的な登場人物を残さなかったからかもしれない。または、込み入ったプロットを中心に劇を構成する作風が、そのあらすじを伝えるだけでは評価され得なかったのかもしれない。それならば、シャーリーの作品の魅力はどこにあるのか。清教徒革命による劇場閉鎖直前に上演された『姉妹たち』を読み解くことで、シャーリーの魅力に光を当てたいと思う。

2. ジェイムズ・シャーリーとチャールズ一世

ジェイムズ・シャーリーは1596年、エリザベス女王の晩年に生まれ、ジェイムズ一世、チャールズ一世の時代、クロムウェル (Cromwell) の共和制の時代を生き、1660年のチャールズ二世の王政復古を体験し、1666年、ロンドン大火の後に亡くなっている。1612年頃オックスフォード大学に入学し、1618年に初めて詩が出版され、その頃結婚したようである。1620年頃、イギリス国教会からローマ・カトリック教に改宗したと考えられている。教師をしていたが1625年の『お世辞学校』より劇作家としての道を歩み始める。[2]

1625年に戴冠したチャールズ一世は同年フランスより王妃を迎える。結婚当初、ヘンリエッタ・マライア王妃はまだ若く、チャールズ一世の傍にはジェイムズ一世の時代からの寵臣バッキンガム公がいて、国王と王妃の仲は疎遠であった。王妃ヘンリエッタは、ヘンリエッタ・マライア王妃一座のパトロンとなり、シャーリーはその一座に向けて主に喜劇を書き始める。[3]

1628年のバッキンガム公暗殺後は、王と王妃はおしどり夫婦となり、芝居好きのヘンリエッタ・マ

ライア妃に感化されたのか、王も芝居の後で、共にダンスをすることもあった。シャーリーの『博徒』（*Gamester*, 1633）のプロットのアイディアはチャールズ一世が出したとも言われている。[4]ヘンリエッタ・マライア妃は 1633 年にモンテーニュ（Walter Montagu）作の仮面劇『羊飼いの楽園』（*The Sheperd's Paradise*）に自ら出演するほどの芝居好きである。ピューリタンのパンフレット作家でモラルの改革に燃えていたウィリアム・プリン（William Prynne, 1600-69）が論文『ヒストリオマスティクス』（*Histriomastix,* 1633）の中で女性が舞台に立つことを攻撃すれば、シャーリーは芝居『籠の中の鳥』（*The Bird in a Cage,* 1633）をプリンに捧げて、作品を通して反論したこともある。シャーリーは、ペストによる劇場の一時閉鎖のため、1637 年にアイルランドへと旅立ち、アイルランドの演劇界に影響を与えることとなる。

1640 年、シャーリーは、アイルランドから帰国し、マッシンジャー(Philip Massinger, 1583-1640)に次いで国王一座の座付き作家となり、1640 年から 1642 年まで、国王一座のために芝居を書く。劇場閉鎖の直前に上演されたのが『姉妹たち』（*The Sisters*）であり、その次に用意された芝居が『宮廷の秘密』(*The Court Secret)*である。

チャールズ一世は、1628 年議会が提出した「権利の請願」を認めたものの、1629 年の議会解散からその後 11 年間議会を開くことなく専制を行った。スコットランドとの対立で、1640 年 4 月と 11 月に議会を招集したが、議会との対立は深まるばかりだった。1642 年にピューリタン革命が勃発し、王は 1649 年に処刑され、共和制が始まる。

エリザベス一世の時代から宮廷や貴族に庇護されていたイギリスルネサンス演劇の時代は、1642 年の劇場閉鎖で終わる。演劇界と宮廷は密接に結びついていた。国王は演劇を王の権威を誇示する道具のひとつとして利用し、演劇界は宮廷の庇護を受けて発展した。ピューリタンは、王と一部の貴族を中心に動いていた政治に異議を唱え始め、演劇を含めた祝祭的な行事を禁止していく。シャーリーの劇作家の人生とは、政治に翻弄された人生だったのである。

３．『姉妹たち』の作品概要

劇場用に書かれたシャーリーの最後の 2 作品の扱いは、劇場閉鎖のために変わってしまう。『姉妹たち』は、1642 年の 4 月 26 日にその上演権を宮廷祝典局長(Master of Revels)のヘンリー・ハーバート(Sir Henry Herbert)によって許可され、国王一座によってブラックフライアーズ座(The Blackfriars)にて上演されている。そして、1652 年にハンフリー・モーズリー(Humphrey Moseley)とハンフリー・ロビンソン(Humphrey Robinson)の二人により、『新作六作品』(*Six New Plays*)という題名で出版される。[5]シャーリーは、王政復古以降、演劇界に戻って活躍することはなかった。1642 年上演の『姉妹たち』がシャーリーにとっては、劇場閉鎖前に上演された最後の作品である。その次に書かれた『宮廷の秘密』は、シャーリーが劇場のために書き下ろしたものの、上演されることはなかったチャールズ朝演劇の最後の作品といえるだろう。

『姉妹たち』は、イタリアのパルマ(Parma)を舞台に、題名に現れるポーライナ(Paulina)とアンジェリーナ(Angellina)姉妹の結婚問題と、フラポロ(Flapolo)を首領とする盗賊の一味の窃盗の物語が絡み合って展開していく。両親の死後、ポーライナ一人が遺産を受け継いでおり、アンジェリーナには遺産はない。ポーライナはプライドが高く、結婚を望み、妹のアンジェリーナは控えめで、おとなしく、修道女になろうとしている。叔父アントーニオ(Antonio)は、ふたりの際立った性癖を直そうとする。

盗賊の首領であるフラポロは、森の中で、盗賊達の世界を作っている。フラポロは、まず占い師に変装してポーライナの館にやってくる。彼はポーライナにパロマ公爵ファーニーズ（Farnese）との結婚を占い、その後、自ら公爵に変装してやってきて、ポーライナとの結婚を決める。そこへ、本物の公爵が現れ、アンジェリーナに求婚する。最後に、ポーライナは偽物の公爵と結婚しただけでなく、実は乳母の子供であり、財産相続人でもなかったことも判明する。プライドの高いポーライナとプライドを持たないアンジェリーナの姉妹に、おとぎ話のような結末が用意される。

だが、いわゆる「あらすじ」だけではシャーリー

の作品を理解したことにはならない。『姉妹たち』には、役者と観客の作り出す演劇空間を知りぬいたシャーリーの劇作家としての職人技が生きている。

シャーリーの最大の魅力は、会話から成り立つ人間像と、微妙な人間感情の理解にあると思う。人間感情の喜怒哀楽とはやっかいなものである。同じテーマを取り上げても、人に感動を与える場合と不快感を与える場合がある。観客の受容が悲喜劇をコントロールする。観客が誰に感情移入し、誰を笑うかをうまくコントロールしなければ、作品は喜劇でありながら、悲劇にもなり得てしまう。笑いのコントロールはさらに難しい。当時の観客が芝居を受け入れるか受け入れないかは、その時代の観客の好みに合うかどうかにかかってくる。時代にも敏感である必要がある。シャーリーが当時の観客に人気のある作家であった理由として、笑いについて、プロットと人間感情の操作について、時代性について、『姉妹たち』を題材に考えてみたい。

4．笑いについて

笑いは、作者により書かれた台詞と、その台詞を語る役者の技量により、生み出される。ここでは、シャーリーのテキストから、当時の舞台を想像し、どのような笑いが起こったのかを、考察する。

ポーライナは、自分の館を宮廷と、自分自身を女王と考えるほどの見当違いをしており、観客の笑いの対象として描き出されている。叔父アントーニオが「もしかしたら、女王が身をやつした方なのですか？」と冗談を言いえば、ポーライナは真に受けるので、叔父はさらにからかう。

Your grace should be a little more reserv'd
And entertain none that did treat of marriage
To your private conference, until they had
In public receiv'd audience like ambassadors.
(Act 1.Scene 2)[6]

求婚を個人的に受けるのではなく、あたかも一国の女王のように、聴衆の前で大使から受けるべきだ、と叔父はからかうのである。ポーライナは、召使いに白杖を持たせるべきという提案も気に入る。宮廷の儀式よろしく、白杖を持ってでてきた召使い達でさえ、これは行き過ぎだとわかっている。視覚的に観客は、これが宮廷のパロディになることがわかる。[7] 冗談が通じず、冗談を真に受けてしまうポーライナは、笑いの対象となる。この場合、観客がポーライナを哀れに思うと笑いは起こらない。ポーライナは、笑われる対象として位置づけられなくてはならない。宮廷の儀式どおりに、コンタリーニ伯が、聴衆の面前でポーライナに求婚するという一種の劇中劇が始まる。コンタリーニが言葉の限りを尽くしてポーライナを褒め上げると、ポーライナは舞い上がり「この返事は後でつかわす、この宮廷で自由にするがよい」とすっかり女王気取りである。召使も、求婚者も、視覚的にはすべて宮廷風に整えた上で、女王でないポーライナが女王のふりをしていくところに、笑いが生まれる。

『姉妹たち』の中で、最も笑いの的となるのはポーライナの召使の一人パイプローロ（Piperollo）と執事のルーシオ（Lucio）である。英国の宮廷財務記録（pipe roll）をもじった名前のパイプローロは、フラポロ率いる盗賊達に捕まえられ、金のある場所を教えるから助けてくれと命乞いをし、あろうことか、金のありそうな場所として、自分の親の家と、ポーライナの屋敷を教える。

フラポロ達一行は、変装をして数学者（Mathematician）——占星術を行う集団——として、ポーライナの屋敷に乗り込む。17 世紀半ば、占星術はイギリスでもてはやされていた。御用占星術師ウィリアム・リリー（William Lilly,1602-1681）は議会派の有利になるような予言を多く行ったという。[8] 占星術師は国の政治の行く末をも占い、占星術師の言葉は議会の判断の一つの基準となっていた。社会が変わろうとしている時代に、未来が見えにくくなっていた時代に、占星術がもてはやされたのであろう。

パイプローロとルーシオは偽者の占星術師の占いを信じてしまう。盗賊に襲われた過去を見事に言い当てられ、パイプローロは、彼らの変装を見破ることなく、盗賊達を占星術師と信じ込む。パイプローロはナイトの爵位が与えられ、執事のルーシオは主人になると予言され、有頂天となる。占いの場面は、舞台の上で面白おかしく描きだされる。パイプローロは手を差し出し、盗賊の一人に手相を見て

もらっている。パイプローロは自分の手相に夢中になり、盗賊の片方の手が自分の財布を抜き出していることに気がつかない。ルーシオは、主人になれると言われてもすぐには信じられず、もう一人にもみてもらい、財布を抜き取られる。占いの確認をしながら、財布を抜き取られるわけで、観客は、彼らの愚かさを楽しむことになる。

偽者の占星術師をすっかり信じてしまったパイプローロとルーシオは、地代を取りにいく時に、自分達が盗賊に襲われることがないかどうかを、占ってもらう。盗賊達は、正確な時間と場所を聞き出し、必ずや盗賊に襲われるだろう、だが頭を割られても命までは奪われないから大丈夫と太鼓判を押す。

その後、財布を盗まれたことに気づいたアントーニオが小作人達を呼んだので、盗賊達は逃げ出していく。だが、パイプローロとルーシオは、財布をすられたことにも気がつかない。地代を取りに行けば、盗賊に襲われると予言されても、地代を取りにいくのは止めようとは思わない。逆に、盗賊に襲われなければ、自分達の出世はないと考える。そうして、時間も場所も違わずに出かけていき、盗賊に襲われ、出世の道が保証されたと信じ込んで、大いに喜ぶ。パイプローロにいたっては、最後に頭を割られていなかったことを思いだして殴ってもらう。

Piperollo. And yet, now I remember, there wants a circumstance, my pate is not broke yet, that was a clause; the Chaldean was a little out.

Frapolo. I had forgot. [aside.] ----Will you be prating, sirrah?

[He breaks his head]

Piperollo. Now 'tis done; I thank you, dear gentlemen, I thank you; go forth, and be a knight! (Act 4, Scene 1)

ポーライナとパイプローロは、観客に笑われる対象だが、ポーライナとパイプローロに観客が同情してしまうと、芝居の雰囲気は全く変わってしまう。笑われる対象は、笑われるのにふさわしいように、作家シャーリーによって、準備される。アントーニオは学者達が偽者であったことを見抜くのに、ポーライナもパイプローロも、最後まで彼らの正体がわからない。さらに、パイプローロと盗賊達を比べると、盗賊達の方が観客の共感を呼ぶように描かれている。たとえば、パイプローロが盗賊と一緒に、自分の両親を襲う場面では、有り金を全部持ち去ろうと主張するパイプローロに対して、盗賊達の方が、少しは残してやろうと言っている。パイプローロは、襲った女性が魔女でないかどうか確かめるのに、水につけてみたらいいとまで言っているが、その女性は実の母親なのである。シャーリーは、パイプローロを全く共感できない人物として設定したあとに、パイプローロを笑いの対象としている。ポーライナは、コンタリーニ伯が口にした「盲目の恋の主人」が、キューピッドを指していることもわからずに、コンタリーニよりも彼の主人こそが自分にはふさわしいと思いこむ。彼女の無知蒙昧さが、当時の観客の失笑を買う。ポーライナのプライドの高さ、パイプローロの愚かしさが際立てば際立つほど、観客は彼らを笑う時に、良心の呵責を感じなくてすむ。シャーリーの職業作家としての腕は、手堅い演技をする劇場人により、発揮される。

5.プロットと人間感情の操作

シャーリーは、人物の性格を描き出すよりも、人間関係を描き、独白よりも会話を通して、作品を仕立てる作風を持っている。変装、劇中劇等の演劇のモチーフを使って作品を組み立てている。『姉妹たち』は、わかりやすい印象を与える作品である。プライドが高いポーライナと、慎み深いアンジェリーナが対比するように描かれているためである。

ポーライナをからかうために、猿芝居の片棒をかついだコンタリーニは、近くに控えていたアンジェリーナに一目ぼれする。大仰な言葉でポーライナを褒め称えていたコンタリーニに対し、アンジェリーナは「あなたの言葉は洗練されすぎていて、私にはわかりません。私たちは宮廷からはとても遠いところにいます」と、ポーライナと正反対の受け答えをする。コンタリーニは自分の小姓ヴェルジェリオ（Vergerio）を恋の代弁者としてアンジェリーナに仕えさせる。

アントーニオは、遺産のないアンジェリーナを自分の元に置き、修道女になることをやめさせようと、レアンドロスの恋物語を聞かせたり、クレオパ

トラがアントニーにキスをしている絵を見せたり、ダンスの教師をつけたりして、恋を覚えさせようとする。アントーニオは何人かの女性を送り込む。フランスのモードを知り、歌の理論を知り、数ヶ国語を繰り、ゲームができる女性がいる。55 歳なのに 25 歳にしか見えない若さを保つ秘訣をもつ女性がいる。彼女たちは何も持ってはいないけれど、生きるための商売道具はもっており、それだけプライドがあるのだ（they're proud already; they have nothing / But their trade to live upon）(4.2)と侍女はアンジェリーナに説明する。女性を褒め称える詩を書くことができる学者もやってくる。仕立て屋、香水屋、宝石屋、拍車製造者もやってくる。

Angelina. Do ladies
Wear spurs, my friend?
4 Citizen. They may in time. Who knows what may be done.
If one great lady would begin? They ride
Like men already.... (Act 4. Scene 2)

女性だって馬に乗るはずだという言葉は、新しい女性像を作り出している。盲人や、歩けないふりをしたペテン師も施しを受けにやってくる。すべて、アンジェリーナにプライドの持ち方を教えようとする人たちである。

叔父の教育の成果があったのか、修道院に行くといっていたアンジェリーナではあったが、コンタリーニの恋の代弁者として送り込まれた小姓のヴェルジェリオに恋をする。恋するアンジェリーナは、もはや修道女になることはできないと嘆く。彼女はヴェルジェリオに訴える。「あなたが、私をこの迷路から救い出してくれないかぎり、私は自由という絶望の中で生きることになるのよ(and unless / You help me in this labyrinth, I must / Live in despair of freedom)(4.3)」修道院に入るよりも、恋に破れてこの世の自由の中で生きるほうがつらいのである。シャーリーは、恋を覚えた女性の心を描き出すことにかけては、非常に長けた作家である。

自分の思いのままに行動する登場人物がいて、プロットができあがり、プロットがあって、人間感情の綾が描かれる。登場人物の想いは、確実に観客に届けられる。たった一つの言葉、たった一つの仕草で伝わる想いがある。シャーリーは、言葉で登場人物の心を揺り動かし、同時に観客の心を揺り動かすことに長けていた。だから、当時の観客が喜ぶ芝居を書く事ができたのである。それは、「あらすじ」によって伝えられるものではなく、シャーリーの言葉を劇場で直に聞く事によってしか経験し得ないものである。

6.偽者の王フラポロにみるシャーリーの時代性

1642 年の劇場閉鎖の数ヶ月前に上演された『姉妹たち』は、シャーリーの時代へのまなざしが感じられる作品でもある。プロローグに、「ロンドンはヨークへ行ってしまった(London is gone to York)」という一節があり、これは、1642 年に、議会と対立した国王チャールズ一世が、体勢を立て直すため、ロンドンを離れてヨークへ移動したことを物語っている。

プロローグが終わると、「あの布告(proclamation)は気に入らない」という盗賊の言葉で芝居は始まる。この布告が何を意味するのかは、観客には最後になるまで知らされることはないが、気に入らない布告という言葉だけが先行するのには意味がありそうだ。議会を開かなかった 11 年間の専制の中で、チャールズは議会の承認なしに収入を確保するために、囲い込みや課税を行っている、それは多くの布告として国民に知らされたはずだ。[9]

Have not we
A Common-wealth among ourselves, ye Tripolites?
A Common-wealth? a kingdom; and I am
The Prince of Qui-va-las, your sovereign thief,
And you are all my subjects. (Act 1. Scene 1)

フラポロは「俺たちは、俺たちで共和国（commonwealth）を作っていやしないか」と言ったあと共和国を王国(kingdom)と言いかえ、自分を「だれか君主」（the prince of Qui-va-las）とみなし、盗賊達を臣下（subject）と呼ぶ。布告を出す側に対して、新たに王国を作ろうという構図は、王と王党派に対する議会派の機運を感じさせる。盗賊たちは、「法律も法律を作ったやつらもくそくらえ」と、パ

ルマの法をこきおろし、無法者の自分らこそ王侯貴族であり、フラポロを自分たちの「君主」(monarch)と呼ぶ。

フラポロは、その後、お互い対しては、盗賊になるな、信仰心を持つように(religious)と説く。「無法者には守るべき宗教(religion)があるのだ」と語る。フラポロによれば、それは異教徒でも、ユダヤ教徒でもキリスト教徒でもない、すべての宗教である。イングランドの歴史は、複雑に入り組んだ宗教問題と政治問題の歴史である。議会が開かれなかった11 年間、国王を支えた一人であるカンタベリー大司教のウィリアム・ロード（William Laud）は、同一の儀式と祈祷書をイングランドのすべての宗派にも強制しようとして、抵抗したピューリタンを迫害した。すべての宗教を束ねるのではなく、すべての宗教を認めようとするフラポノの思想にも、時代に対するシャーリーのまなざしがある。[10]

盗賊の頭フラポロは、まず占星術師に変装し、次には、パルマ公ファーニーズに変装して、ポーライナの屋敷に乗り込む。森の中で王国の君主だとうそぶいていた本人が、パルマ公国の公爵ファンタリーニに扮して、偽りの宮廷の偽りの女王ポーライナに求婚する。偽者の占星術を信じたポーライナは、この求婚を受けることになる。その一方で、劇の中盤過ぎ、第4幕第1場になって、本物の公爵が登場し、アンジェリーナを見初め求愛する。[11] 最後に、ポーライナは乳母の子供であり、パイプローロの姉（妹）で、本当の遺産相続人はアンジェリーナであることがわかる。ポーライナは偽者の女王であっただけでなく、偽物の遺産相続人でもあり、彼女のプライドは押しつぶされる。劇の最初で「あの布告は気に入らない」と言われていたその布告とは、フラポロを捕らえるための布告であったことが観客に知らされる。公爵を騙ったフラポロの罪は、アンジェリーナの命乞いで、許される。お話は、控えめなアンジェリーナがパルマ公ファーニーズと結婚を決め、王侯貴族との結婚を望んでいたプライドの高いポーライナは、盗賊の首領フラポロと結婚してしまったことが分かるところで終わる。プライドの高いといつか厳しい報いを受け、多くを望まない控えめな態度が祝福を受けるという、教訓じみた結末となる。

結局、生まれの賤しいものは賤しく、本物の公爵は正しく、偽者は偽者であることが暴かれる。その意味においては、『姉妹たち』は、王党派の視点から書かれた作品であると言える。ジェントリーが中心だった議会派に対して、王と貴族からなる王党派は、その生まれにおいて、最後には正しいことが証明されるというわけである。アイラ・クラーク（Ira Clark）は、シャーリーはどの作品においても、王権を擁護する立場におり、血筋が必ずや問題となるとしている。さらには、シャーリーの登場人物が、その行為でもって、高貴な生まれかどうかがわかると考えていて、ポーライナの例をあげている。[12]

シャーリー自身は、王妃ヘンリエッタ・マライアのお気に入りのひとりであり、王党派でアイルランド総督でもあったストラフォード伯ウエントワース(Thomas Wentworth, Earl of Strafford, 1593-1641）との交流もあった。ヘンリエッタ王妃一座と国王一座に多くの芝居を提供し、1642 年の 9 月 2 日に劇場が議会により閉鎖されると、シャーリーは、ロンドンを後にして、パトロンである王党派のキャベンディッシュ (William Cavendish,1592-1676)の元へ行くことになる。

『姉妹たち』は、1653 年に他の 5 作品と一緒に出版されることになる。1653 年とはクロムウェルが護国卿となりこれから独裁への道をたどり始める時期にあたる。1653 年の出版に際して、シャーリーは、一つ一つの作品に新たに献辞を付け加えている。『姉妹たち』は郷士ウィリアム・ポーレット（William Paulet, Esquire）に捧げられている。シャーリーは、このような作品は「最も高貴な生まれの人々(王侯貴族と言ってもいい人たち)に受け入れられ、保護」 (the acceptance and protection of the greatest nobility, (I may say princes)されてきたのに、今ではそんなパトロンを捜すのは難しいと嘆いている。劇場が栄え、貴族が作家のパトロンとなり劇団を支えていた時代は、すでに 10 年前のこととなっている。1642 年に書かれた戯曲本体と、献辞の間には約 10 年の開きがある。その間に 1649 年にチャールズ一世は処刑され、共和制が始まり、世の中は大きく動いた。シャーリーの考え方がその間、一貫していたとは考えられないが、王党派の側に身を置くことをやめることはなかった。

それでも、気になるのは、本物の公爵よりも、盗

賊のフラポロの方がずっと魅力的に描かれていることである。それは、彼らが襲う相手が間抜けだったり、強欲であったりすることからきている。劇の途中で仮面劇に似た出し物をするのも、フラポロ率いる盗賊達である。ほとんど、供のものを連れずに、隠密にこの館に到着する本物の公爵に比べて、フラポロには彼を信頼し、付き従う「臣下」が沢山いる。劇は、盗賊の場面で始まり、フラポロのエピローグで終わる。ほんの数場面しか登場せずに、本物の公爵であるということ以外に、心に残る言葉ひとつ口にする事のない公爵は影が薄い。

マーティン・バトラー（Martin Butler）は、チャールズ一世とフラポロを並列することで、国王の信頼性のなさを、偽王の信頼性のなさと変わりないほど貶めている」とシャーリーが王の信頼性（正当性）に疑問を投げかけていると感じている。[13] ジュリー・サンダース(Julie Sanders)は、偽者の公爵フラポロと本物の公爵ファーニーズの両方に、チャールズ一世の姿を見ていて、森で自分達自身の王国を作るフラポロにチャールズの姿を重ねるだけでなく、宮廷にいるのではなく、アントーニオの館に泊まり、その後、ポーライナの館を訪ねる公爵にも、ロンドンを離れて北部へと兵と資金を工面しにでかけたチャールズ一世の姿を重ねている。[14] 刻々と変化する情勢の中で、シャーリーが、誰をモデルに書いたのか、誰を揶揄したのかを特定することは難しいし、その思いを探るのは難しい。だが、国王の王位に対して疑問を投げかけていたとだけはいえるのではないだろうか。

芝居の終わりにはエピローグがついていて、その言葉はフラポロによって語られる。パルマ公により罪を許されたフラポロではあったが、その言葉を信じられずにいる。彼は、聴衆に呼びかけ、自分はポーライナを捨ててここから逃げ出すつもりであることを告げる。最後に観客側につくのは、公爵ではなくて盗賊のフラポロなのである。[15] シャーリーは、王党派であるという建前を最後まで貫きながらも、時代への敏感さから、当時社会に浸透していた思想を持つフラポロを描いてしまったのではないだろうか。

シャーリーは、観客の感情に訴える総合的な芸術を作り出すことのできた職人の劇作家であった。会話を通じて作り上げられる人間像は、決して後世に名前を残すような大きな登場人物にはなりえなかったものの、その場その場で共感できる人間であり、当時の観客の嗜好に合っていた。宮廷の近くにいて、王党派の一員と目されながらも、時代に敏感だったシャーリーは、反体制分子であるフラポロも、当時の観客の共感を呼ぶように描き出した。劇場がその後 18 年間閉鎖されることになる前の最後の芝居は、宮廷に庇護されながら発展した一つの時代の最後にふさわしい芝居となっている。

注

1. エリザベス朝の寵児シェイクスピア、ジェイムズ一世の時代に活躍したフレッチャーに比べ、チャールズ一世の時代の作家達の評価は低い。グローブ座に代表される、誰もが観劇することができた張り出し舞台を持つ半野外の公衆劇場はまだあったものの、芝居の中心は、一部の観客層を得ることになったブラックフライアーズ座のような室内の私設劇場に移り、劇団は宮廷に密接な結びつきを持つようになった。
2. Burner には Shirley に関して集められた実際の資料が詳しい。
3. 1625 年にシャーリーの処女作『お世辞学校』を上演したのは、エリザベス王妃一座である。その後、この劇団が中心となってヘンリエッタ・マライア妃一座が作られているが、必ずしも同じメンバーによる同じ劇団とは限らないようである。Bentley Vol.1. p.219.
4. Bentley. Vol.5. p.1111.
5. 『新作六作品』には、それぞれの戯曲の前に扉がついており、『宮廷の秘密』だけは、1653 年、その他の 5 作品には 1652 年の年号が添えられている。
6. 引用は、*The Dramatic Works and Poems of JAMES SHIRLEY* ed. W. Gifford and Alexander Dyce, 6 vols. London: J. Murray, 1833.より引用している。
7. 原文の White Stave は、宮廷の儀式に使わ

れていたようである。白い棒のことだが、ここでは白杖と訳しておく。

8. ウィリアム・リリーの『キリスト教占星術』（*Christian Astrology,* 1647年）は、占星術の技法の解説書であるが、現代でも売られているベストセラーである。
9. ジュリー・サンダースは、フラポロの共和国(commonwealth)発言を 1630 年代の国王の専制への非難と取っている。サンダースは盗賊の登場する芝居は、当時の観客によって受け入れやすいテーマであると言っている。Sanders, 2002. P.10.
10. チャールズ一世は、イングランドの国教会の首長であるが、フランスから迎えたヘンリエッタ・マライア妃は熱心なカトリック信者であり、イングランド内のカトリック教徒への迫害が和らぐ原因ともなり、それはまた、後のピューリタン革命の火種のひとつにもなった。ジェイムズ・シャーリー自身、英国国教会の牧師であったのに、1620年頃にローマ・カトリックに改宗したらしいと伝わっている。
11. アンジェリーナは、コンタリーニ伯爵の小姓に恋していたが、この小姓が実はコンタリーニの元恋人で、彼を慕って男装して小姓として付き従っていた女性であることがわかる。コンタリーニは昔の恋人と結ばれ、アンジェリーナは公爵と結婚することになる。
12. Clark, P.122.
13. Butler, P.265.
14. Sanders, 1999. P.9, 11.
15. サンダースは、偽物の王が政治に対して転覆性を持っているという意味で、フラポロがエピローグを言うところに、注目している。Sanders, 1999. p.11.

Bibliography

Bentley, Gerald Eades. *The Jacobean and Caroline Stage.* 7 vols. Oxford: Clarendon Press. 1941.

Burner, Sandra A. *James Shirley: A Study of Literary Coteries and Patronage in Seventeenth-Century England.* London: University Press America, 1989.

Butler, Martin, *Theatre and Crisis 1642-1660.* Cambridge: Cambridge University Press, 1984.

Clark, Ira. *Professional Playwrights Massinger, Ford, Shirley & Brome*, Kentucky: University Press of Kentucky, 1992.

The Dramatic Works and Poems of JAMES SHIRLEY ed. W. Gifford and Alexander Dyce, 6 vols. London: J. Murray, 1833

Sanders, Julie. *Caroline Drama The Plays of Massinger, Ford, Shirley and Brome.* Plymouth: Northcote House, 1999

……., 'Beggars' Commonwealths and the Pre-Civil War Stage: Suckling's *The Goblins*, Brome's *A Jovial Crew*, And Shirley's *The Sisters'. Modern Language Review, 97-1* January 2002.

Sharpe, Kevin, *Criticism and Compliment The Politics of Literature in the England of Charles I,* Cambridge University Press, 1987.

……. *Politics and Ideas in Early Stuart England Essays and Studies*, London and New York: Printer Publishers. 1989.

大井邦雄監修　『快楽夫人』エリザベス朝喜劇 10選 ジェイムズ・シャーリー　大井邦雄訳　早稲田大学出版部 1998.

佐藤清隆　"ピューリタンとモラルの改革―ウィリアム・プリン"　社会的異端者の系譜：イギリス史上の人々　浜林正夫、神部庸四郎編　三省堂,1989.

常行敏夫　市民革命前夜のイギリス社会　岩波書店,1990.